

# 教師の持つ学校場面における子ども観に関する研究

高橋 さゆ里

(秋田県適応指導「南さわやか教室」)

## ． 目 的

子どもたちとの関わりにおいて、子どもたちの「よさ」を認めていくことは、子どもを伸ばす手段になることが明らかになっており(阿久根ほか,1979)、教育において子どもの「よさ」を認めることの有効性が指摘されている。だが同じ行動を見たとしても、それに対する教師の「よさ」の認知の仕方、感じる程度は大きく異なる。ある行動を見て「よい」と認知するためには、「よい」と認知するための枠組みが存在するのではないだろうか。

本研究ではその枠組みを「子ども観」としてとらえ、教師が学校場面において子どもをどうとらえているか、学校場面における子ども観を明らかにするものである。

## ． 方 法

1) 調査対象：A県内の小学校教師 31名(男性9名、女性22名)、A大学教育学部学生 190名(男性67名、女性123名)

2) 調査時期：平成10年11月～平成11年2月

3) 調査方法：質問紙法による。尺度は「教師の望む子ども像」(磯貝、1979)などを基に作成した子ども観尺度を使用した(5件法70項目)。

## ． 結 果 と 考 察

子ども観の因子構造を明らかにするため、子ども観尺度70項目について因子分析(主因子法、バリマックス回転)を行った。因子負荷量0.40以上を有意味ととらえ抽出した結果、教師、大学生ともに4因子解が抽出された(表1)。教師の第1因子と学生の第3因子は、共に模範的な児童についての子ども観であるもの

の、どの部分に模範的態度を求めているかという点において相違がみられた。学生は「学業面」として独立した子ども観であるが、教師は学業場面に限らず、「学校生活全体」としての総合的に模範的態度を求める視点となった。ここには、学生の子ども観の中に現れた温厚さ、リーダーシップについての項目も含まれる結果となった。教師は日常の学校生活に結びついた具体的な子どもの活動に目を向け、そこから子どものパーソナリティを判断する手がかりを得ている(明石、1991)。教師は毎日、様々な子どもの生の活動や生の表情に関わっており、こうした経験が、学業場面だけにとどまらず、いろいろな部分で子どもを見ようとする、総合的な子ども観を形成したと推測される。

共通している因子として「意欲的・挑戦的因子」があげられた。学校生活では、苦手意識を覚えるものに対しても向かい合わなければならないこともある。様々な体験の場としての学校で、より多くのことを身につけるためには、自分から進んで挑戦する姿、失敗しても再度挑戦しようとする意欲的姿勢が必要だとする考え方は、教師、学生を問わず子どもをとらえる共通した視点として存在していることが分かった。たくさんの経験を通して多くのことを学んでもらいたいと願うところに、この視点が現れたと考えられる。

全体的に教師の子ども観は、子どもに対して積極性を求めるものであると言えた。今後は、このような子ども観が、不適応状態の子どものよさ認知にどのように影響するのかを検討していくことが課題である。

表1 小学校教師の子ども観と大学生の子ども観

小学校教師 (n=31)			大学生 (n=190)		
因子	因子名	寄与率	因子	因子名	寄与率
第1因子	学校生活全体における模範的態度因子	17.86%	第1因子	意欲的・挑戦的因子	12.28%
第2因子	意欲的・挑戦的学習態度因子	16.92%	第2因子	教師に対する尊敬態度因子	11.26%
第3因子	活動性因子	14.07%	第3因子	学業面における模範的態度因子	10.64%
第4因子	快活性因子	8.31%	第4因子	温厚さ重視のリーダーシップ因子	7.39%

